

## 孤魂祭祀と演劇

田仲 一成<sup>※</sup>

中国の演劇、特に悲劇の発生の母胎として、孤魂祭祀の儀礼を想定するのが、私の研究の特徴である。中国の研究者にはこのような考え方をする人がいない。このような考えに至った経緯と筋道、及び今後追及すべき方向について、一言述べてみる。

この発想の契機は、1978年にはじめて香港の中元節の祭りや演劇を見て、この祭りが不慮の死をとげて空中をさまよっている孤魂・遊魂を招いて祭るもので、演劇もこれらの孤魂を鎮めるために行われているらしい、ということに気がついたからである。祭りの場には、土地の神が招請されて鎮座している。孤魂は道士や僧侶が取次役として、恨みを神に訴え、神はこれを聴いてかれらを慰め鎮撫する。午後から夜を徹して、この場で演劇が演じられる。しからは、この演劇の機能は何か。演劇は一般にこの場に鎮座する神々に捧げられると解されるが、同時に孤魂にも捧げられているのではないか。祭りの場には神に対する供物の他に孤魂に対する供物も並べられており、むしろ孤魂への供物の比重が大きい。この点からみれば、供物の一種である演劇も孤魂への奉獻という目的が含まれているはずである。

孤魂は陰陽の関係では「陰」の気を負っているから、これを鎮めるには「陽」の気が必要であろう。いわゆる「大紅大緑」の派手な衣装と高声の歌唱、銅鑼と太鼓の高音響から成る祭祀演劇は明らかに「陽」の気を負っている。屈強の武将が兵卒を率いて刀槍を振り回す勇壮な武劇は「陽」の極致であり、妙齡の美女の甲高い美声も「陽」の表現であろう。美女もまた時に刀槍を振り回す演出を示し、男に劣らぬ「陽」の迫力で舞台を圧倒する。孤魂の「陰」の恨みはこれによって滅殺され、浄化されるのではないか。同時に孤魂を恐れる観客もかれらへの負い目をその分だけ忘れ得るのではないか。しかりとすれば、演劇、とくに非業の死を遂げた人物を主人公とする悲劇は、この孤魂祭祀から生まれたものではないか。

これが当時の香港での私の直感であり、その後、多数の孤魂祭祀の事例観察において、また文献の分析を通して、繰り返し確かめてきたものであった。今日、上梓した『中国演劇史』もこの発想に基づいて展開されている。

さて、現地調査を継続してみると、この孤魂祭祀にもかなりの地域差が見られることに気づく。私のみた事例の中では、孤魂に対する恐怖が最も強いのは、香港の郷村に見る広東本地人系の祭祀である。ここでは、各郷村において、毎年、神々の誕生日に神誕祭祀が行われるが、その都度、僧侶道士を呼んで孤魂祭祀（太平清醮）が挙行されている。神の誕生祝いより、その神の威力を借りて孤魂を鎮めることに重点がおかれているように見える。これは、神誕祭祀として異例のこ

---

※東京大学名誉教授・桜花学園大学人文学部教授

とである。また、ここでは、特に財力のある大郷村において、一般には10年に1度、時には3年、5年などに一度、3日～7日にわたる大規模な孤魂祭祀（太平清醮）が挙行されている。この時は、神を招いた仮設神殿（お旅所）に地獄十王の絵を掛けるか、または作り物の十王殿を設営する。これは他の地域の建醮祭祀にはない形である。一般に建醮祭祀は「祈福」と「攘災」の双方を目的とするが、ここで「十王図」「十王殿」を設営するのは、葬式の形態であり、あきらかに「攘災」つまり「孤魂の鎮撫」に重点があることを示す。

また、この祭祀では、祭の場に孤魂を監視する「大士王」（観音大士の化身、「監齋死者」）なるものの巨像を設営するが、最後の晩にこの大士王像を村の区域全域に回遊させる「大士出遊」なる行事がある。村の若者たちが2丈ほどもある大士像をかついで、村の要所をめぐる。川筋や草むらの地点に至ると、像をおろして地上に据え、ゆっくり左右の各方位を遠望させる。近辺に潜む孤魂ににらみをきかせ、かれらが郷村の安全をおびやかすのを抑止する意図をこめている。交通事故の死者がでた場合でも大士王像を下ろして同じ所作をさせる。若者たちは息を殺し、大士王の巨像が暗闇をにらむ。孤魂と神が対峙する恐怖と緊張の場面である。

このような行事は孤魂の深い恨みを村人が感受していることの反映であり、「悲劇」という芸術形式はこのような集団的心性を基礎としてはじめて発生し得るものではないか、というのが私の推論の方向であった。目に見えないが祟りをするものとしての孤魂への恐怖が広東系祭祀の「大士出遊」の集団心理のなかに最もよく現れている、と実感したのである。

これに対して、福建系の場合、大士王像を作っても「出遊」は行わない。シンガポール・マレーシアの閩北の福州人、興化人では、「監齋死者」と称する小像を置くだけである。台湾の閩南人の「建醮祭祀」では、「大士王」にあたるものは作らない。見えざる孤魂への恐怖心が広東グループに比べおそらく低いのであろう。その代わり、これらのグループでは、見えざる孤魂を形象化した「かたしろ」を作る傾向がある。

例えば、シンガポール福州人の場合、往古の帝王、后妃、英雄武将、陣亡兵卒、貞婦烈女など歴史上の有名な孤魂の人形を並べる。恐怖心がうすれ、孤魂の形象化が起こり、儀礼が娯楽、演劇に転化する兆候を示す段階にあるとみてよいのであろうか。江蘇省南通県で見た童子戯でも、英雄、烈女が剪纸絵や人形の「かたしろ」に作られて、祭りの場に配置されていた。同じ孤魂祭祀でも、僻地の広東では原始的な恐怖心理が残り、経済的先進地帯や中心部に近付くにつれて、恐怖心理から解放され、孤魂が形象化され、儀礼の娯楽・芸能化、演劇化が進むと理解してよいのだろうか。今後も調査を重ねて検討したい。